

## 「朝日新聞」問題

表題は2015年5月に刊行された集英社新書。2014年の朝日新聞「騒動」に注目し、新聞や雑誌、本に目を通してきた。うかつにも本書を見逃していた。ただちに読み進んだ。「現役社員による、徹底検証」だけあり、新たに示唆を得ることも多かった。

本書は次の7章からなる。第1章 そもそも慰安婦報道問題とは何か 第2章 記事を取り消しながら謝罪なし—慰安婦報道の2014年検証記事 第3章 池上コラム問題と元朝日記者へのバッシング 第4章 衝撃的な吉田調書報道とその取り消し 第5章 「重大な誤り」—吉田調書報道への見解 第6章 「読者の信頼を裏切るもの」—慰安婦報道への報告書 第7章 朝日新聞は原点に帰れ

朝日新聞はなぜ間違ったか。なぜ謝れなかったか。紹介したいことは多いが、第7章と「おわりに」の最後だけ書きとめておきたい。

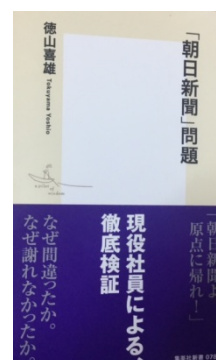
新聞社はずねに読者の方を向き、ジャーナリズムの鉄則を守り、読者を信頼し、信頼される存在になる。そして、読者とともに新聞をつくっていくことを第一義とする。経営陣はそれを最大限に尊重する。これが新聞の原点ではないか。

最後にもう一度いうが、ジャーナリズムの鉄則は「提示された『事実』の裏付けをとり、裏付けがとれたなら、公益性を判断するためその事実に社会的な文脈を与え、そして取材対象者に反論の機会を与える」というものだ。この鉄則を愚直(确实)に守っていくなかで、ジャーナリストの仕事とは何なのか、ジャーナリストとして何をすべきなのか、を正面から考え合わせていくことが新聞記者として日々やることではないだろうか。

新たな取材・執筆、さらに新たな取材・執筆という絶え間のない繰り返しのなかで、日々新しい出来事に接するのが新聞記者の生業である。ジャーナリズムとは何かと自ら考え、議論するなかで、職業倫理も醸成されていく。それは記者個々人が育むもので、トップダウンで与えられるものではない。朝日新聞は原点に帰れ。

今後、朝日新聞がやるべきことは、第三者による報告書と見解をもとにし、自らが検証することであろう。そして、慰安婦報道と原発事故をめぐる報道を新たな気持ちではじめなければならない。……

最後にこれも避けて通れないこととして、「編集権」についてきちんと朝日新聞の考えを打ちだすとともに、記者個々人にかかわる「プレスの内部的自由」や「抗命権」をどう担保するのか、指針をださなければならないだろう。土台を整備しないかぎり、進めている数々の改革は本当の意味で実を結ばないのではないか。



(2017年2月6日)